

## 「クリムト展 ウイーンと日本 1900年」

東京都美術館 2019.04.23～07.10 豊田市美術館（愛知県） 07.23～10.14

「グスタフ・クリムト」（1862～1918）は、装飾豊かな作品を描いたことで知られるオーストリア人で、様々な図形、線、色を一定の配列で繰り返し描いて、アツと驚く模様（パターン）と「金箔」（金を金槌で叩いて薄く伸ばしたもの）や「銀箔」を作品上に見事に使いこなしている画家である。

本展では、その「金箔」を多用した代表作の一つで、旧約聖書に登場する女性を官能的に描いた「ユディト1」が来日し、他にも「初期の写実的な作品」や知られざる「風景画」など、幅広い油彩画「20点」などが展示されている。さらに、注目されるのは、全長34mの壁画《ベートーヴェン・フリーズ》が、非常に精巧な複製ながらも再現されて公開されていることである。

クリムト《ユディトとホロフェルネス1》 1901年 油彩/カンヴァス



「ユディト」は、エルサレム近郊の街ベツリアに攻め入ろうとするアッシリアの将軍「ホロフェルネス」に寝返ったふりをして信用させ、彼が酔い寝込んだ際にその首を刎ね、街を救った聖書外典中の女性である。「ユディト」は、正面を見つめているが、豪華なネックレスと背景が緊密に結びつき、半開きの口に焦点の定まらない左右アンバランスな目には、国を救った聖書の女性の面影はない。作品の「金地による背面装飾」に加え、とても「豪華な額縁」にも注目したい作品である。

《オイゲニア・プリマフェージの肖像》 1913～14年 油彩/カンヴァス



晩年の成熟期に描かれた元女優の婦人をモデルとした「肖像画」は、パトロンとして知られた「オットー・プリマフェージ」の依頼で制作された作品である。

画面の右上の「極彩色の鳥」は、この時期に画伯が試みた「東洋的モチーフ」を取り入れている。そして、鮮やかな色彩と大胆な筆使いに埋め尽くされてもどこか涼しげが目立ち、大きく抽象的なタッチが見られて、この時期の画風の様式をよく表現してい

るのが特徴とされる作品である。